

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	追悼特集
タイトル	研究と実践の架橋の先駆者としての大野精一先生を偲ぶ
Title	
著者	斎藤 俊則
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 52-54
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000295/

追悼特集

研究と実践の架橋の先駆者としての大野精一先生を偲ぶ

齋藤 俊則^a

(星槎大学大学院教育学研究科)

本稿では2021年10月に逝去された大野精一先生（以下、大野先生）を偲び、その足跡を振り返る。はじめに大野先生の略歴と筆者との関わりを述べる。そのあと、4つの視点から大野先生の足跡を振り返る。

1. 大野先生の略歴と筆者との関わり

大野先生は1971年4月より東京都立高等学校に社会科教諭として着任され、以降、2006年3月に退職されるまで35年間、延べ6校に勤務された。その後、2006年4月より開学した日本教育大学院大学学校教育研究科に教授として着任された。日本教育大学院大学は2017年3月に星槎大学へと統合され、同年4月より新たに大学院教育実践研究科として再スタートを切った。大野先生はその際の初代研究科長として着任され終生勤務された。

筆者は2006年4月の日本教育大学院開学時より逝去された2021年10月まで同じ大学に同僚として勤務した。2020年4月に筆者が他研究科に異動するまで、14年間を同じ研究科で過ごしている。日本教育大学院の開学当初大野先生は58歳であり、片や筆者は33歳で大学専任教員としての初めての着任であった。年齢の隔たりや、教職出身のベテラン実務家教員と研究者志望の若手教員といった背景の違いなどから、相互の親交が常に深かったわけではない。しかし、日本教育大学院大学では教員キャリアに関する共同研究のメンバーに加えてくださり、またさまざまな機会に意見交換の機会をくださるなど（時には見解が大きく対立することもあったが）、何かと気にかけていただいたように思う。

2. 理論と実践を往還・架橋する教師像

ここから大野先生の足跡を振り返る。大野先生を振り返るときにまず想起されるのは「理論と実践の往還・架橋」という惹句である。これは教職大学院制度の柱となる理念を表すものである。大野先生の高科教諭および大学教員としての足跡は、まさに「理論と実践を往還し架橋する教師」像をいち早く体現するものであった。

初等中等教育の教職経験者が多く実務家教員として高等教育の現場に参画するきっかけとなったのは、2008年4月より開始された教職大学院制度であった。大野先生はそれに先がけて、2006年4月より実務家教員として学校教育分野の専門職大学院で教鞭を取ら

^a 星槎大学大学院教育学研究科准教授

れた。筆者が知る大学教員としての大野先生は「教育相談」の専門家であり、学術と実践の双方を常に重視しながら現職教員や教職志願者への指導にあたられた姿が強く印象に残っている。ご自身がものされた著作リスト(大野, 2018)を読むと、高等学校教諭として活躍された若い頃より多くの文章を発表され、教育相談分野に関わること自身の知見を継続的に深く掘り下げられてきたことがわかる。この継続があったからこそ、大野先生は「理論と実践を往還し架橋する教師」像を体現される存在にいち早くなられたのだと推察する。

3. 構築の対象としての専門性

つぎに、大野先生の足跡が示唆するものを振り返る。大野先生の足跡が最も強く示唆するのは、キャリアにおける「構築の対象としての専門性」であったと考える。大野先生の専門性、すなわち教育相談の専門家としての自他による認知は、確立された専門分野における資格取得のような、外的な権威によって付与された類のものではない。それは高校教諭としてのキャリアの初期より長きにわたる、まさに理論と実践の往還と架橋の過程の中で、試行錯誤の末に構築されたものであった。

先に述べた大野先生の著作リスト(大野, 2018)に目を通すならば、教育相談は専門外である筆者であっても、その膨大な論考のタイトルの中から、その時代ごとに教育現場の課題とされたさまざまな事象に教育相談の立場から関わられてきたことがわかる。そして、前半は高等学校教諭、後半は大学教員と立場を変えながら、50年にわたり継続されたその取り組みの蓄積が、大野先生の体現される「教育相談の専門性」を構築したのだと了解される。筆者はここに、専門性とは既存の権威から与えられるものではなく、自らが試行錯誤を通じて構築すべきものである、という示唆を読み取った次第である。大野先生が教職分野の大学実務家教員の先駆けとなった理由もこの示唆の中にあると筆者は考える。

4. 教育研究活動の柱としての対話

つづいて、大野先生の教育研究活動の特徴づけるものを振り返る。一つに絞るならば「対話」こそがそれにあたると筆者は考える。ここでいう対話とは、事象に対する当事者間の認識がそれを通じて変容するような、言葉を介した関わりの過程を指している。大野先生は教育においても研究においても常にこのような意味での対話を中心に置き、事に取り組みましたと筆者は推察する。

教育の場面では、教育相談の専門家としての背景がそうさせるのか、研究室で学生とゆっくり話し込む姿を何度もお見かけした。大野先生が対話を通して学生と向き合う姿には、言葉を殊の外大切にしている大野先生の姿勢が感じられた。実に、大野先生の研究室には本当に多くの文献が置かれていたことも、それを裏付けるように思われる。

他方、研究に関して私が特に知るのは、インタビューとの間に対話的な関係を構築し、その境遇に真摯に向き合う大野先生の姿であった。それは大野先生の発案で行われた、初任教員の教師キャリアの発達に関する共同研究(斎藤・都丸・大野, 2009; 都丸・斎藤・大野, 2010)の中でのことであった。この研究は初任者教員へのインタビューと現職教員へのアンケートにより、初任時における「悩みや心配、問題や課題」の内容とその対処の

類型を探索的に明らかにするものであった。この研究で、大野先生はインタビューのあまりに多忙な、もう少し踏み込んで言えば、精神的面における危機的な状況を鑑みて、複数回予定したインタビューを初回のみで中止された。このとき大野先生はインタビューの置かれた状況を深く憂慮し心配されていた。筆者は初回のインタビューに同席しなかったが、おそらくそれはインタビューという形を借りた、インタビューのための対話だったのではないかと推察する。

5. 先駆者の核心としての不全感

最後に、大野先生の足跡の背景にあり、その足跡を形作る核心となったものを振り返る。筆者は大野先生が終生向き合われた「不全感」こそが、彼をして「理論と実践を往還し架橋する教師」の先駆者たらしめた核であったのではないかと推察する。この不全感という語は大野先生の著作リスト(大野, 2018)に出てくる言葉である。すなわち、大野先生によれば、キャリアの前半である「研究的実践者」としての高校教諭時代、そして後半の「実践的研究者」としての大学教員時代、その双方の立場において不全感に「常につきまといわれて」きたという(大野, 2018, p.1)。他にも、この著作リストには大野先生が「迷い」や「違和感」と共に長いキャリアを歩まれたことが逐一記されている。筆者にはそのような不全感、そして迷いや違和感といった「解決しきれないもの」の存在こそが、終生にわたる大野先生の教育相談への探究心の核心だったのではないかと考えるのである。そして、キャリアを通してこの不全感を無視せず、また無理に解決しようとはせずに、友として共に長く歩まれたからこそ、大野先生は教育相談の深い知見をもって「理論と実践を往還し架橋する教師」の先駆者となられたのであろう。

以上、大野先生の足跡を4つの視点から筆者なりに振り返った。大野先生の50年余りのキャリアの厚みと、そこにある足跡の大きさは、もとより筆者の筆で伝えきれるものではない。すなわち、本稿で伝えきれなかったことのすべては筆者の未熟さにその責がある。

末筆ながら、筆者に本稿の執筆を許された全ての方に御礼申し上げる。そして、大野先生との時間に改めて感謝を捧げ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

引用文献

- 大野精一 (2018) . 大野精一著作リスト (2018年8月31日現在) . Retrieved from <http://schoolcounseling.cocolog-nifty.com/bookreview/files/2018.pdf> (September, 7, 2022)
- 斎藤俊則・都丸けい子・大野精一 (2009). 初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究 (その1) 教育総合研究 (日本教育大学院大学研究紀要) 2, 135-144.
- 都丸けい子・斎藤俊則・大野精一 (2010). 初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究 (その2) 教育総合研究 (日本教育大学院大学研究紀要) 3, 119-137.